

考古学コースのご案内（新入生向け）

2007



この小冊子は新入生のみなさんに考古学コースのことをよく知ってもらおうという目的で作成しました。2年時のコース選択もしくは今後の授業の履修選択に役立ててくれたら嬉しいです。

Web ページ : <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

連絡先 : tomidaikouko@yahoo.co.jp (考古学コースのアドレス)

考古学

● 考古学って何？

考古学は人類が残した活動の痕跡、つまり建物の跡などの「遺構」や、土器・石器などの「遺物」から、過去について考える学問です。

そのため、人類の登場からつい最近まで、過去の出来事すべてが研究の対象となります。また、日本国内だけでなく世界のあらゆる地域と比較研究できることに特色があります。そして、そういった過去の研究をふまえた上で自分たちの文化をもう一度見つめ直すといったことも重要なことです。

他の学問の研究方法を応用したり、最新の科学技術を導入したりした研究も多くおこなわれています。最近では GIS（地理情報システム）の活用、放射性炭素同位体を使った年代測定など幅広い研究が行われています。

● 発掘調査

考古学の研究法で一番大切なのは「自分の目で遺跡や遺物を実際に見る、遺物の場合は触ってみる。」ということです。個人では博物館や埋蔵文化財センターなどの施設を訪ねて遺物を見ることができですが、考古学を肌で感じるには発掘調査に参加することが一番の近道です。富山大学の考古学コースでは毎年夏に長期調査が予定されています。昨年は測量調査のみでしたが、例年は発掘調査を実施しています。調査終了後、3年生は報告書を作ります。

● 調査の流れ

発掘調査はむやみに地面を掘って遺跡や遺物を探すものではありません。まず前調査（分布調査）を実施し、その後遺跡の規模や位置を知るために試掘調査や探査が行われます。そしてようやく発掘調査が行われます。掘る際には土層の一層一層を丁寧に手作業で取り除いていきます。また測量や遺構図の作成など遺跡や遺物の出土状況を詳細に記録していきます。調査後には報告書の作成のために図面や遺物を整理したり、遺物を実測して図にししたりする作業をします。こういった作業全体を通して考古学的な経験や技術を身につけていきます。

● 身近な考古学

ここまで説明してきて、考古学ってなんだか難しいなと思った方がいるかもしれません。しかし、私たちの周りには意外と身近に考古学が存在します。例えば、教育委員会や埋蔵文化財センターが発行している遺跡の発掘調査報告書を読んでいると自分の住んでいる街が以前発掘調査をされた遺跡で埋め尽くされていた・・・なんてことがあります。そこら辺に捨ててある茶碗、昔は誰が使っていたんだろう。今自分が立っている土地、

景観はずっと変わっていないのか？などなどそんな素朴な疑問が出発点です。ぜひみなさんも考古学に触れてみましょう！（最新の考古学ニュースをのぞいてみましょう→「Yahoo!ニュースー考古学」<http://dailynews.yahoo.co.jp/fc/domestic/archaeology/>）

【参考文献】

安蒜政雄（編）2002『考古学キーワード [改訂版]』 有斐閣双書

<2006 年度測量調査風景>



<2006 年度研究室旅行>



富山大学の考古学コース (Web ページより抜粋、一部改変)

● 歴史ととりくみ

考古学は、人類が残した遺跡や遺物を手がかりに、過去の文化や社会背景などを研究する学問です。人類の登場から近世・近代に至るまでを扱い、さらに広く世界の諸地域と比較研究できることも特色です。埋蔵文化財の専門員や学芸員になるための基礎技術および専門知識の習得と、国際的な視野に達人材の育成を目指しています。

富山大学人文学部考古学研究室は、1979年に創設されました。開設以来20年以上にわたって、発掘調査及び測量調査や分布調査、研究室旅行(遺跡の実地研修)を実施してきています。特に、夏季に行われる発掘調査は、発掘技術と基礎考古学の習得を目的にし、さらに発掘報告書の作成を通じて論理能力を育成するもので、考古学研究室でもっとも大きな仕事ともいえます。このように、実地、実践的な取り組みをすることで富山大学の大きな特徴があります。なお富山大学では日本の考古学が学べます。

人文学部の専門コースへの進学は2年生の前期からですが、考古学をしたくて待ちきれず、1年生から出入りする学生もいます。

毎年12名程度の学生が入ってきますので、大学院生も含めて、研究室には総勢40人ほどのメンバーがいます。2007年度は院生2名、4年生11名、3年生9名、2年生3名です。

「3年次編入学」と「社会人入学」も実施しています。

● 教員の紹介

黒崎 直 (Kurosaki Tadashi) 人文学部教授

2002年10月に、奈良文化財研究所から富山大学へ転任しました。

京都市の出身で、立命館大学文学部史学科を卒業後、奈良国立文化財研究所(現・奈良文化財研究所)に入り、以来30数年間、平宮跡や飛鳥・藤原宮跡の発掘調査・研究に携わると共に、文化庁文化財保護部(現・文化財部)において全国の遺跡・文化財の調査や保護・活用の業務に関わってきました。

日本考古学(弥生～古代)が専門で、最近は、

- 1.日本における初期都城・宮殿、官衙遺跡の成立と展開。
 - 2.古代・中世のトイレ遺構に関する総合的研究。
 - 3.農具を中心とした初期稲作技術に関する調査分析。
 - 4.遺跡・史跡の保存と活用に関する実践的研究
- などに、関心を持っています。
-

高橋 浩二 (Takahashi Kouji) 人文学部助教授

1999年11月に富山大学へ着任しました。前任地の大阪府羽曳野市教育委員会では、4年半ほど埋蔵文化財行政に携わっていました。

専門は日本考古学で、古墳や古墳時代について研究しています。とくに最近は、

1. 富山と能登(能越地方)における古墳の出現と大型化へいたる過程について。
 2. ヒスイの考古学的研究。
 3. 先史から近代にいたる日本海交流の歴史的展開について。
- 以上3つの課題に取り組んでいます。

<主要研究業績>

- ・「潟湖環境と首長墳—古墳時代の日本海ルートは存在したのか—」
- ・『富山大学 考古学研究室論集 蜃気楼 一秋山進午先生古希記念—』、2003、六一書房
- ・「能越地方における古墳の展開—前期を中心として—」『富山市日本海文化研究所紀要』第16号、2002
- ・「北近畿系統の土器と山陰系統の土器—越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の諸段階—」『富山大学人文学部論集』第37号、2002
- ・「古市古墳群成立前後の埴輪」『玉手山古墳群の研究』・埴輪編、2001、柏原市教育委員会
- ・「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』22号、2000、庄内式土器研究会
- ・「S字状口縁台大付甕の伝播とその評価」『国家形成期の考古学』、1999、大阪大学考古学研究室
- ・「北陸における古墳出現期の社会構造」『考古学雑誌』80-3、1995、日本考古学会

● 授業内容

歴史学入門

人文諸科学に対する理解力を涵養し、入学後の研究に幅広い視野で臨めるようにする入門授業の一環として、歴史学についての関心を喚起し、基礎的知識を提供する。具体的には、中学や高校の歴史の授業とは別の仕方、すなわち近年の研究成果を研究過程を踏まえながら説明し、歴史学という学問の面白さ、それに取り組む楽しさを伝えたい。(Web シラバスより)

<複数教員による講義／1年次開講>

考古学基礎演習

考古学の基本的な研究資料は、遺跡や遺物である。これら自ら口を開かぬ物質的な資料から、人間の歴史を聞き出すには、彼らと仲良くなることが肝要。遺跡・遺物に親しむことを目指す考古学の入門講座。(Web シラバスより)

<後期に開講>

考古学概論

考古学とはどんな学問なのか、各時代の特色など、基本的な事を学びます。希望があれば1年生からでも聴講できます。<後期に開講>

考古学実習

考古学を学ぶ上で必要な技術を身につけることを目的とした授業です。主に測量技術や、製図、その他発掘調査に必要な技術を勉強します。

<前期・後期に3時限続きで開講／2・3年次に履修>

考古学演習

研究論文を読むことや、発掘調査報告書の作成を通して考古学の研究方法について学ぶ授業です。「考古学実習」は身体で覚えることをとくに重視するのに対し、こちらは自分の頭で考えることも重要になってきます。

<前期・後期に開講／3年次に履修>

考古学特殊講義

「考古学概論」よりも、専門的な内容を取り扱います。ある一つの研究分野にテーマを絞り、詳しく学びます。

<前期・後期に開講>

考古学購読

英語で書かれた論文を読むことで、海外の考古学研究について学習します。

<前期・後期に開講>

● 部屋の案内

- ・ 301 号室 (考古学実験室) …実習や演習の授業を行う教室です。パソコン 2 台と研究雑誌や参考書などの書物、実測器具が置いてあります。書物の貸出は行っていませんが、教室内で読む限りでは誰でも利用できます。
- ・ 209 号室 (考古学資料室) …全国各地の発掘調査報告書が収蔵されています。利用したい方は考古学コースの教員か所属の学生にその旨をお伝えください。
- ・ 倉庫 …発掘や測量で使用する道具や過去に実測した遺物が収められています。

● 在学生の声

(考古学コースを選択した理由)

考古学をやってみたいと思ったのは、最初は高校生くらいのときです。もともと歴史が好きだったというもありよく博物館に行っていたし、高校の日本史の先生が授業の途中であちこち行って調査しているという話を聞いて自分の住んでいる地域の古い歴史を調査してみたいと思った。けどそこには文献があまりなかったし、文献よりもモノによる調査のほうが面白そうだったから、また、あまり部屋に閉じこもってじっとしているよりは外で体を動かしたりすることのほうが好きだったからで、考古学はその両方を満たすいい学問だと思った、だから考古学コースを選択しました。

実際に考古学コースに入って、覚えなきゃならないこととかやらなきゃならないことがたくさんあって大変だったりするけれども、考古学の知識や技術を身に付けたり、泊りがけで調査に行ったり、研修旅行でたくさんの遺跡や博物館に行けたりするのはとてもいい経験です。

(佐藤雄太)

考古学を学ぼうと思ったきっかけは、直接的に関係があるかわからないけど、父の影響が大きいかなと思います。普通の電気会社の社員だけれど、歴史が好きで、勉強家で、私は小さいころから博物館や史跡公園、寺院などに連れて行かれました。大阪に住んでいたの、京都や奈良のお寺には毎週のように引っ張られていきました。そんな中で、私も古いものを意識するようになったのだらうと思います。中学生の頃には、ただ漠然と考古学者になりたいと思っていました。考古学の中でも飛鳥・奈良時代に興味がある私は、各自の好きな時代を勉強できる富山大学の考古学研究室に入れて、嬉しく思っています。

(松岡治奈)

(研究室旅行) *2006年は静岡に行きました

6月28日～7月1日まで研究室では研究室旅行がありました。行くところは毎年違い、今年は静岡県に行きました。ただ旅行に行くわけではなく、その前にパンフレット作りというのがありました。2年生は時代ごとに分かれて静岡県の遺跡紹介を作りました。遺跡紹介をするために、その遺跡の報告書などいろいろな本を読まなければならなかったのですが、報告書を見るのは初めてで、最初は分からない事が多く大変だったけれどとても勉強になりました。

旅行中はいろいろな遺跡や博物館に行きます。また、日程の中に自分が紹介した遺跡が入っていれば、その遺跡に行く事ができます。私は自分が紹介した中で1つの遺跡に行く事ができました。苦勞して報告書や本を読んだので、実際に見ることができた時はとても嬉しかったです。

パンフレット作りはとても大変な作業だけれど、とても楽しく勉強になる旅行です。

(松木綾子)

(夏の長期調査) *2005年は夏休みに発掘調査を行いました。2006年は8月21日～25日にかけて稲積オオヤチ古墳群(富山県氷見市)の測量調査を実施しました。

考古学研究室では、毎年、遺跡の発掘調査を行っています。調査期間はだいたい、夏休みのうちの 一ヶ月程度です。この期間中は原則、泊まり込みで共同生活を営むことになるので、研究室のメンバと絆が深まったり、様々な人間ドラマが生まれたりします。よって、夏の発掘は学術的な成果のみならず、研究室の活動を代表する一大イベントと言えるでしょう。

2005年度には2004年度に引き続き、阿尾島田A2号墳という古墳の調査を行いました。この古墳は海や平野を見渡せる山の上に位置し、周囲を林に囲まれています。発掘と呼ばば聞こえは良いですが、実際には 陽は当たるしヤブ蚊(あの白と黒のシマシマの、でっかいやつ!!)は出るし、木々の枝が邪魔でうまく測量できないし、斜面が崖だったり掘ったら掘ったで木の根っこやミミズが邪魔をしたりと、なかなかシビアな世界です。まず、山の上まで荷物や水を運ぶという段階からして運動不足気味の大学生には一苦労で、中には連日の発掘で知らず知らずのうちに無理をしてしまい、体調を崩すという方もしばしば見られます。

ちなみに僕は、調査開始当初、第2トレンチという調査区担当の班に所属し、古墳を実際に掘ったり地層の解釈を考えたりしました。実際に土を掘るといのは意外に精密な作業で、技術を要求される大変な仕事だと思いましたが、うまく掘れるようになってくると楽しくて楽しくて仕方ないくらいに面白かったですね。また、図面の取り方・作り方を学べたのも良い経験になったと思います。その後、調査区に一区切りついた段階で測量班へ移り、測量や測量に邪魔な木々の伐採、測量のための杭打ちなどを行いました。機材を用いるとはいえ、斜面に正確に杭を打つのはとても難しかったです。このように僕は発掘と測量の両方を経験出来たわけですが、いずれの作業もただ勉強になったというだけでなく、とても楽しいものでした。確かにシビアな面もありましたが、僕は次の発掘がとても待ち遠しいです。

(北村志織)

2回生の私にとって今回の測量調査は楽しみでもあり不安でもあった。調査現場が丘陵上にあるため荷物を運びながら斜面を歩かなくてはならず、毎回の登り下りがとても疲れた。測量調査は考古学実習で行った測量とは全く違った。スタッフと平板の間に何本も木があるためエスロンを上手く張る事ができず、測量のスピードが速いためマイラーにどんどん点が落とされ、コンターラインを結ぶ時に正しくつなげているか困惑した。私はエスロンの張り方もレベルの操作も上手くなく、平板も設置できず班員の方々に迷惑ばかりかけ

ていた。そのため、調査期間中は少しでも注意されないよう行動する事で精一杯だった。こうして今回の調査は無事に終了したが、私自身は失敗ばかりの調査だった。今年の調査は指示に従うだけでよかったが、来年の調査では指揮する立場になるため不安である。また、来年の調査までに平板の設置を上達させる事は絶対だ。

(坂田裕之)

(コースの風景)

考古学研究室はなんと言っても研究室でみんなと過ごす時間がとにかく長いです。研究室に入ってからすぐに研究室旅行のパンフ作りが始まるため、毎日研究室に行きみんなと顔を合わせるようになります。そのため、同学年の人だけでなく先輩たちとも接する機会も増え、他コースよりも早く仲良くなることができます。研究室には常に人がいて、夜中でもたいてい明かりが灯っています。球技大会の日はみんなでお昼ご飯を作って食べたり、打ち上げをしたり、調査のときはみんなで寝食を共にするなど、とにかくみんなで何かをすることが多いです。やることは多くて忙しいけれど、みんなで楽しく過ごせるのが考古学研究室のいいところだと思います。

(高畑郁美)

考古学コースでは、2年生のとき毎週月曜日の2～4限にかけて考古学実習という授業があります。内容はというと今年の前回は、夏に泊まりで調査があるのですが、それに向けて測定の仕方を学びました。後期は報告書作成のために、土器などの遺物の実測や拓本について学ぶこととなります。測定についての勉強は、コースに入ったばかりで何もわからない状況と、高価な精密機器を扱うということで何かと緊張したりします。さらに測定は、「早く正確に」行わないといけないので実習のうちから厳しいこともあります。後期の実測では細かい仕事があるので目が疲れます。測定でも目は疲れたりします。とにかく、何事も経験なので実習には皆、真剣に取り組んでいます。

実習は3コマ連続ということで大変だと思われる方もいるかもしれませんが、それだけにやりがいがある授業だと思います。先生だけでなく大学院の先輩にも指導していただけて、また、大変な中にも楽しいことがあったりします。ぜひ考古学コースでの考古学実習を楽しみにしててください。

(村上 直)

● 活動・イベント

4月・・・新歓コンパ（新2年生を歓迎する会です）

春の分布調査（2006年度は2日間南砺市で行いました）

6月～7月・・・研究室旅行（各地の史跡・博物館を巡ります。2・3年生は事前に各時代や遺跡別にパンフレット作りをします。）

8月・・・夏の長期調査

12月・・・考古学談話会・忘年会

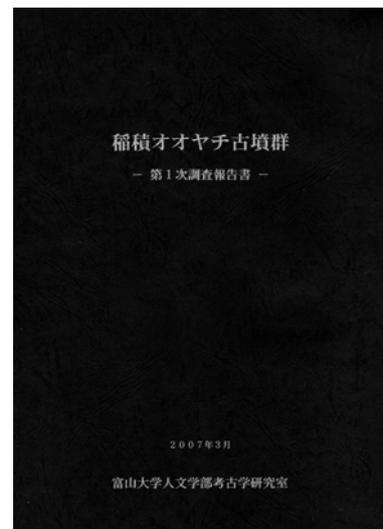
3月・・・卒論発表会・追いコン

● 報告書

(2006年度)

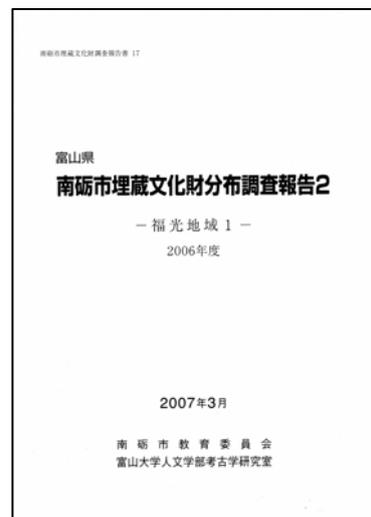
- ・ 測量調査報告書

院生と3年生が夏の測量調査の文章や測量図をまとめました。



- ・ 分布調査報告書

2年生が後期の考古学実習で遺物の実測図、文章、分布図などを作成しました。



● 卒業後の進路と修士・卒業論文

(進路)

3年間で学んだことを生かし、学芸員や行政職に就職を希望する人が多いようです。しかし最近では、発掘調査の件数も減少し、考古学関係の職業に就くのは難しくなっていると云えます。その他には、教員を目指す人や、一般企業へ就職する人がいます。

(2006年度修士・卒業論文題目リスト)

・修士論文

「北陸の古代土器生産の研究 ―北陸東部の土師器焼成坑の分析を中心として―」

「鳥取城における構造的変遷に関する研究 ―石垣遺構の編年的研究を中心として―」

・卒業論文

「縄文集落の焼失住居に関する一考察 ―岩手県を中心として―」

「富山県朝日町境A遺跡における磨製石斧の石材選択について ―石材調査と使用実験から―」

「北陸における玉作工房の研究 ―弥生時代後期を中心に―」

「家形埴輪の研究 ―スカシ孔に関する一考察―」

「高森遺跡の性格についての再検討 ―建物遺構を対象に―」

「数量的分析からみた古代北陸の軒丸瓦」

「土器組成から見る播磨国境地域の土器様相 ―古代末～中世前期代の消費遺跡を対象に―」

「中世立山信仰の研究」

「縄張りの構造分析に見る加越国境佐々系城郭」

「富山県内における遺跡の活用状況と地域住民のつながり

―「道の駅」におけるアンケート結果を考慮に入れて―」